

# 論述文の作成における制限あるコピー&ペーストの効果

2090073 服部 翔太 ( 齋藤研究室 )  
中等教育教員養課程 情報専攻

## 1. はじめに

総務省の「通信利用動向調査」によると、平成 22 年にインターネットの普及率は約 8 割であり、さらに世代別のインターネット利用状況では、13 歳から 49 歳までの利用が 9 割を超えている。このような ITC の普及に伴い、大学生のレポート作成において、情報収集にインターネットが使われるようになってきている。この学習環境の変化により近年指摘されているのが、インターネット上の他人の文章をコピー&ペーストしてあたかも自分の文章のように使用してしまうコピペ問題である。

しかし、コピペの行為が悪いというわけではない。膨大な情報を素早く処理することが求められる現代においては、コピペは知的技能の一部である。そこで本研究では、コピペを肯定する立場から、レポート作成におけるコピペの効果について検討する。

杉光 (2009) は学生のコピペの問題を指摘し、コピペを (1) 情報処理の技術あるいは機能、(2) コピペをする行為、(3) 他人の文章等を「丸写し」して、自分の文章等と詐称する行為、(4) (3) をコンピュータのコピペ機能を用いて行う行為と定義している。

また、米澤 (2009) は、コピペレポートを無くすための方法として添削指導の有効性を指摘している。

これらの先行研究は、コピペを否定的に捉え、コピペレポートを無くすための方法を検討したものであった。しかし、Igo and Kiewra (2007) はコピペのやり方によっては学習に対して効果があることを明らかにしている。彼らは、大学生や高校生が Web テキストからノートテイキングをするときに制限のないコピペよりも、制限をかけたコピペのほうが、学習に効果的であるという仮説を立て、実験を行った。実験内容は電子的な文章を読み、パソコンのコピペの機能を用いてノートを作成するというものであった。このとき実験参加者をコピペに制限を与えるグループと与えないグループの 2 グループに分けた。2 日後にテストを行った結果、制限のないコピペよりも、制限をかけたコピペのほうがテストの得点が高かった。

これらの先行研究から、本研究では、コピペレポートの問題はコピペ自体ではなく、自由なコピペにあると考えた。そこで、レポート内のコピペを、他人の文書を自分の意見の補足として利用する「能動のコピペ」と、他人の文書を自分の意見の代わりとして利用する「受動のコピペ」と定義し、コピペに対する制限が、「受動のコピペ」ではなく「能動のコピペ」につながるかどうかを検討する。本研究の目的は、(1) 大学生のコピペ利用の実態を明らかにし、(2) 制限をかけたコピペが論述文作成に与える影響を検討する。

## 2. 調査

### 目的

調査の目的は、大学生のコピペに対する意識やコピペの利用の実態を確認することである。

### 方法

愛知教育大学の学生 71 名 (男性 41 名、女性 30 名) が調査に参加した。調査は、Web 上のアンケートツール (Google Forms) で作成したアンケートを利用し、参加者はコンピュータや携帯電話を用いて、アンケートにアクセスし、自分のペースで回答した。質問内容は、コピペを知っているか、コピペの説明、コピペのイメージ、レポート作成におけるコピペの使用頻度、コピペの元となる情報源などである。

### 結果と考察

コピペの説明についての回答を杉光 (2009) の定義に従って分類した結果、全体の 97% がコピペを定義 2 の「コピー&ペーストする行為」として捉えていた。このことから、学生はコピペをコンピュータの機能や行為として理解し、詐称するという悪いイメージを持っていないことが明らかになった。

さらに、全体の 73% がレポート作成でコピペを利用したことがあると回答し、多くの学生がコピペの情報源として Web を利用していた。このことから、学生にとってコピペが通常のレポート作成においてよく行われる行為であることが明らかになった。

### 3. 実験

#### 目的

実験では、コピペに対する制限の有無によって、資料からのコピペ行動にどのような違いがあるか、またコピペに対する制限の有無によって、レポート内のコピペ利用にどのような違いが見られるかを検討する。

#### 方法

愛知教育大学の学生 40 名が実験に参加した。コピペの制約として、内的制約と外的制約の 2 種類を設定した。内的制約とは、レポートの構成を意識させるような制約であり、外的制約とは、コピペの文字数に対する制約である。

実験課題は、Web 上で参考資料を読み、原子力発電所について参加者の考えを 600 字程度のレポートでまとめてもらうことである。実験時間は 90 で、最初の 20 分間で以下の 3 つの参考資料を Web 上で読み、レポートを書く際に参考となる部分コピーし、エクセルのノートに貼り付けをさせた。その後、3 つの参考資料を回収し、60 分間で、ワードを使って 600 字程度のレポートを作成させた。そして、最後にアンケートを行った。

#### 結果と考察

参加者の参考資料からエクセルのノートへのコピペをノート内コピペとし、ノートから作成したレポートへのコピペをレポート内コピペとした。また、レポートの中で、考えや提案、未来の予想や想像が述べられている文章を意見文章、データや決定事項、過去に起こったことや誰かの話が述べられている文章を事実文章とした。そして、意見文章のうちコピペが使われている文章をコピペ意見、事実文章のうちコピペが使われている文章をコピペ事実とした。内的制約と外的制約の有無を組み合わせた 4 条件間で比較を行った。

表 1 は、分散分析の結果である。分析項目は、ノート内コピペの回数、文字数、資料を読み始めてからノート内コピペを行うまでの時間やレポート内コピペの回数、文字数、1 コピペあたりの平均も字数、意見コピペの割合、事実コピペの割合である。「内」は内的制約、「外」は外的制約、「有」は制約があること、「無」は制約がないことを示している。また、「増」は増加したこと、「減」は減少したことを示している。

表 1: 分析結果

分析項目	結果
ノート内コピペ	
回数	内有:減, 内無:増
文字数	外有:減, 外無:増
コピペするまでの時間	条件無 < 外 < 内 < 内+外
レポート内コピペ	
回数	内有:減, 内無:増
文字数	外有:減, 外無:増
意見コピペの割合	有意差なし
事実コピペの割合	有意差なし

ノート内コピペの分析結果、内的制約なしグループではコピペ回数が、外的なしグループではコピペも字数がそれぞれ多くなった。また、条件なし、外的制約のみ、内的制約のみ、内的制約+ 外的制約の順に参考資料を読見始めてから最初にノート内コピペを行うまでの時間が長くなった。条件なしグループは、参考資料を読み、目に付いた箇所をコピペしているため、一度にコピペする文字数も多くなり、参考資料を読見始めてから最初にノート内コピペを行うまでの時間が短いのではないだろうか。これらのことから、内的制約と外的制約が、実験参加者が資料から情報を選択する際に、情報を取捨選択してレポートを構成することに影響を与えていると考える。

今回の実験で、内的制約や外的制約が情報抽出とその利用には影響を与えたが、コピペが能動的か受動的かについては、意見や事実のコピペに有意さがなかったため判断はできない。しかし、有意な差は見られなかったが、制約あり群の意見文でのコピペが少ないことから、他人の意見をそのまま丸写しする受動的なコピペが減るのかもしれない。

#### 参考文献

- Igo, L. B., McCrudden, M. T., & Bruning, R. (2005). Exploring Differences in Students' Copy-and-Paste Decision Making and Processing: A Mixed-Methods Study. *Journal of Educational Psychology*, *97* (1), 103-116.
- Igo, L. B. & Kiewra, K. A. (2007). How Do High-Achieving Students Approach Web-Based, Copy and Paste Note Taking?. *Journal of Advanced Academics*, *18* (4), 512-529.
- 杉光 一成 (2009). コピペ問題は検出ソフトで解決できるか. 『大学時報』, *58* (325), 98-103.
- 米澤 誠 (2009). レポート作成におけるコピペ防止策. 『情報管理』, *52* (5), 276-285.